

地域を訪ねて～北陸新幹線（金沢・敦賀間）【石川県・福井県】～

鉄旅タレント伊藤桃さんが巡る

北陸新幹線 新駅舎と沿線スポット

2015年3月、東京から金沢までつながった北陸新幹線（長野・金沢間）開業から9年。2024年3月に金沢・敦賀間が開業し、東京・福井間が乗り換えなしのおよそ3時間弱で結ばれた。

延伸により、さらに訪れやすくなった北陸地方。今回は、鉄旅タレントとして多方面で活躍する伊藤桃さんに、金沢・敦賀間にある6つの新駅舎とその近隣の鉄道スポットなどを巡る1泊2日の旅をレポートしていただいた。

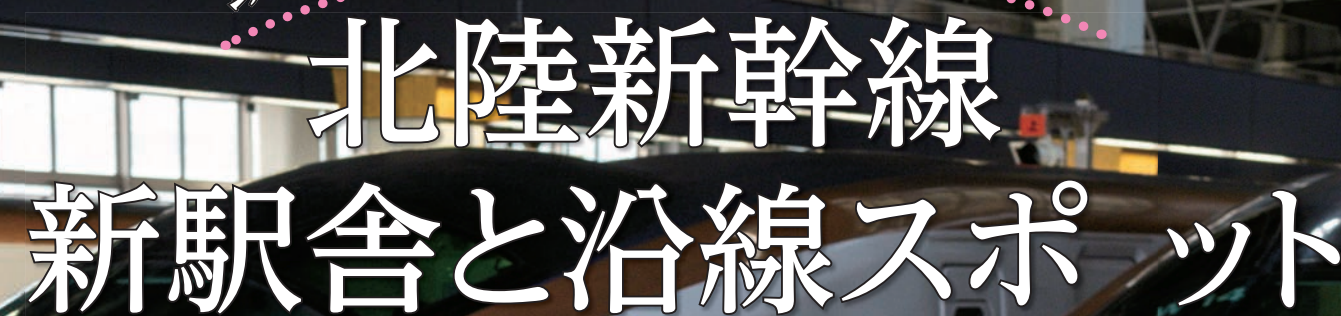
文：伊藤 桃 写真：中西 優

いとう・もも 青春18きっぷで旅を続けるうちに鉄道の旅でしか出会えない旅情にひかれ、いつしか旅の目的が鉄道に乗ることに変わっていた。2016年1月10日、JR全線完乗。22年9月23日、最長片道切符新ルート踏破第1号。著書に『桃のふわり鉄道旅』『小田急全駅ものがたり』『最長片道切符11000kmの旅』などがある。

YouTube 動画は
こちらから！

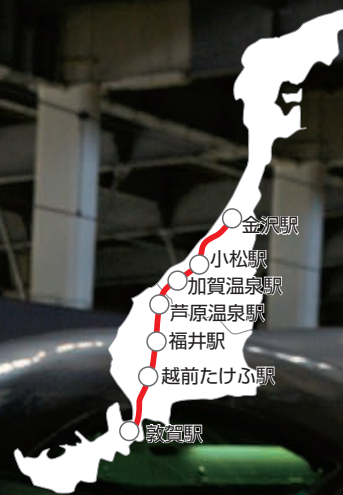
金沢駅に停車中のW7系の前で。
ここから旅がスタートします

9 鉄道・運輸機構だより 2024 Autumn

A Shinkansen train is shown in a station, with large Japanese text overlaid on the image. The text reads '北陸新幹線' (Hokuriku Shinkansen) on the top line and '新駅舎と沿線スポット' (New Station and Along-the-Line Spots) on the bottom line. The background shows the train and station structure.

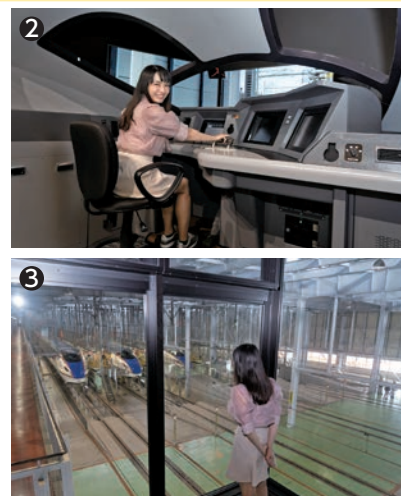
北陸新幹線

新駅舎と沿線スポット



金沢駅に停車中の W7 系の前で。
ここから旅がスタートします

鉄道・運輸機構だより 2024 Autumn 10



① 運転士の制服を着て、展示コーナーの前で1枚
② 新幹線運転シミュレータを体験 ③ 4階見学デッキでは整備中の新幹線を見ることが出来ます

の空気を取り込み、においや音、気温などを感じ取ることができるようになっています。ここで作業をされる方々のおかげで、安全快適に新幹線に乗り車できるのだと感じられました。

5階は展望デッキ。「トレインパーク白山」は小松駅と金沢駅のほぼ中間にあり、時速 200km 以上のスピードで走る迫力満点な新幹線の姿を楽しむことができます。この時はちょうど敦賀へ向かう新幹線に遭遇。一瞬とはいえ大満足でした。

新幹線に特化したミュージアムは実は初めてなのではないでしょうか。ここで学んだことで、今まで以上にぐっと身近になった新幹線に乗り車して、次の駅へと向かいました。

雄大な山並みを表現した小松駅

北陸新幹線の各駅は、地域の伝統、文化、歴史を反映させたコンセプトでデザインされているとのことで、どの駅も個性と魅力あふれる意匠が凝らされています。次に訪れた小松駅構内では、石川県産の日華石を使

用して市松模様に仕上げた壁や、柱には彩り華やかな九谷焼の作品が飾られており、心が華やぎます。そうそう、この駅の外観デザインは日本三霊山の1つである「白山」をイメージさせるものとなっています。金属板がキラキラと輝き、雪のようにも見え、未来感もありますね。この白山の稜線はホームからも見えます。

小松駅の近くでは、“懐かしい”車両にも出会えました。かつて旧北陸本線でも走っていた国鉄型特急電車の「クハ 489-501」。小松駅から歩いて約3分の土居原ボンネット広場にて、今は IR いしかわ鉄道となった線路を見守るようにたたずんでいました。私は現役時代をよく知らない世代ですが、国鉄時代特有のツートンカラーにはなぜか郷愁を感じます。車内に入ると、これまた懐かしい国鉄車両の匂い。その匂いに包まれて「鉄道唱歌」のメロディーを聞いていると、まるでタイムスリップしたようです。

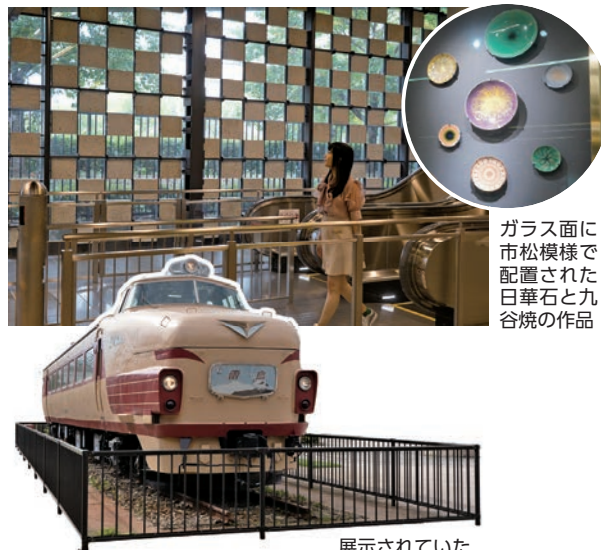
変わりゆくもの、残り続けるもの、2つの魅力が共存する小松駅でした。

個性豊かな2つの“温泉駅”

小松駅から先は、加賀温泉駅、芦原温泉駅と“温泉駅”が2駅続きます。同じ北陸の温泉駅でもガラリと様変わりするのが北陸新幹線の駅の面白いところ。

「温泉郷の風情と城下町の歴史を感じさせる駅」をデザインイメージとする加賀温泉駅は、艶やかな赤が印象に残りました。ホーム、そして外観にあるべんがら格子は、温泉街の“雅”を感じます。改札内待合室には、石川県産の赤瓦を使用した庇も作られ、まるで温泉街の一角を切り取ったかのような。広々とした駅前ロータリーでは、旅行客を待っている旅館の送迎車の姿もあります。

そして、1つ先の芦原温泉駅へ。この駅のデザインイメージは「あわら温泉の癒しと旅情が漂う駅」。落ち着いた色調ながら、木材をベースに構内にも越前和紙をふんだんに



ガラス面に市松模様で配置された日華石と九谷焼の作品

展示されていた「クハ 489-501」

使った駅は、柔らかく温かい印象を受けます。間接照明を使用しているところにも理由があるのでしょうか。ちょうど淡い夕陽が差し込む時間で、ハッとするような美しさでした。加賀温泉駅が艶やかな温泉街のにぎわいを感じさせるのに対し、こちらはシックで静かなひと時を味わえる旅館のようです。

違うところは、もう1つ。この芦原温泉駅からは福井県に入ります。芦原温泉駅に併設する西口賑わい施設「アフレア」への連絡通路には、恐竜の足跡がペタペタとありました。さすが、日本最大の恐竜発掘現場がある“恐竜王国”の福井県。この足跡1つで、県を越えたのだとわかります。もちろん、中にも恐竜が描かれているフォトスポットがたくさん。この「アフレア」にはあわら温泉を中心に福井の魅力を発見できる「ふくいミゅ〜じウム」もあり、楽しみながら福井を知ることができます。

日本初！新幹線と道路の併用橋 九頭竜川橋りょう

さて、すっかり暗くなってきたの



加賀特有の赤瓦を待合室の屋根に使用。壁面には九谷焼のデザインを施したタイルが使われている

芦原温泉

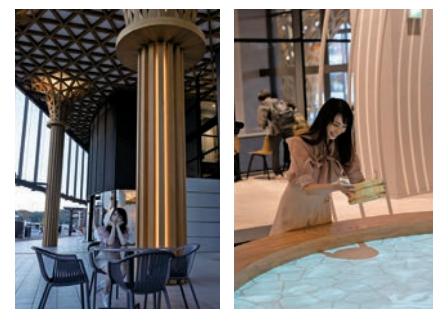


ですが、この日のクライマックスはこの後。芦原温泉駅からは、あえて車で福井駅を目指します。そのお目当ては「九頭竜川橋りょう」。この橋は日本初そして唯一の新幹線と道路の併用橋なのです。道路の開通は2022年10月と新幹線開業より一足早く、新幹線の往来を今か今かと待っていました。真ん中に新幹線の線路があり、その両側に上り線、下り線と分かれて道路があります。

広い空を彩る夕暮れの色も淡い闇に変わり、帰宅を急ぐ車が行き交います。正直な感想は、あっという間。橋の長さは414mですが、ほんのわずかな距離に感じられます。それでも、隣の高い防音壁の向こうに新幹線が走るのかと思うと、なんだかロマンを感じました。



趣ある和の空間をイメージした待合室の前で



アフレア広場でひと休み（左）
湯桶を近づけるとさまざまな情報が浮かび上がるという驚きの仕掛けがありました（右）

悠久の歴史を伝える駅舎と恐竜が戯れる福井駅

2日目の朝は、福井駅の取材からスタート。JRのほかに、ハピラインふくいとえちぜん鉄道、福井鉄道が乗り入れる駅で、駅前には賑やかな様子でした。西口、東口、そして駅舎の中と実に恐竜三昧の福井駅です



九頭竜川橋りょう。中央を新幹線、両側を車が走行する

鉄道・運輸機構だより 2024 Autumn 12

11 鉄道・運輸機構だより 2024 Autumn

福井



福井市観光交流センター屋上で出会った恐竜のモニュメントと改札外の柱の恐竜モチーフ（右）



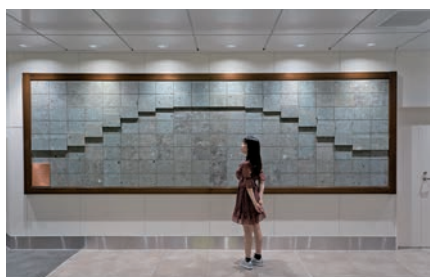
プラットホームの天井は木調ルーバーでくつろぎの空間を演出（上）。左は JR 福井駅。右はえちぜん鉄道福井駅（下）

が、大きなロボットや壁画だけでなく、実は小さな“隠れ恐竜”もいます。場所は改札外のコンコース。ここでも柱に越前和紙が使用され、内照式により淡い空間を演出している

のですが、柱ごとに1体だけ、小さな恐竜モチーフがあしらわれているのです。すぐに見つけることができないからこそ、見つかった大人でも思わずはしゃぎたくなるうれしさ。ちょっとした遊び心がたまりません。

そしてもう1つのお気に入りスポットは、福井市観光交流センターの屋上広場。ここはちょうど新幹線ホームと同じ目線にあり、行きかう新幹線を眺めることもできます。当然、新幹線の内車からこの広場を覗くこともできます。越前がにをくわえたフクイベナートルに、首でハートを作るフクイティタン。そのユニークな姿を車内から見て、ずっと気になっていました。ちなみに、どちらも福井県で化石が発掘され名付けられた恐竜です。

福井駅のポイントは恐竜だけではありません。改札内には福井県の石である笏谷石のレリーフが飾られています。古墳時代から石棺に使用されている石で、日本遺産にも認定されているとか。今、自分が身近にこの石を見ているのが少し不思議な気持ちでした。この石はレリーフだけ



笏谷石のレリーフ

ではなく、ホームやコンコースの待合室にも使われています。

開業に合わせて造られた越前たけふ駅

新幹線に乗り、次は延伸区間唯一の新幹線単独駅である越前たけふ駅へ。格子戸と白壁をあしらった和風デザインのホーム、流し漉きの和紙照明も魅力的ですが、改札内待合室に私はすっかり心奪われてしまいました。幅 10m 高さ 4m の壁一面には、越前和紙がガラスに挟み込まれていて、黄金色に輝いています。描かれた大輪の花も美しく、まるで美術館のよう。ほかにも越前漆器の朱色、越前打刃物や越前指物をイメージした柱デザイン、そして外観には越前瓦と、この駅舎だけで、地元の伝統工芸品を感じられます。

越前たけふ



駅に隣接する「道の駅 越前たけふ」ではこういった工芸品のほか、地元物産を購入できる直売所もあります。旅行客だけではなく、お魚を買いに来ている地元の方で大にぎわいでした。新駅の開業により、こうして街に新しいスポットができたのだな、とうれしく眺めていました。

長いけど一瞬、長いけど安心 新北陸トンネル

この越前たけふ駅を過ぎると、いよいよ終点の敦賀駅。その手前には、北陸新幹線延伸区間で最長のトンネル（約 19.8km）である、新北陸トンネルがあります。

この新しい区間ならではのポイントは、トンネル内で電波が通じるところ。旧北陸本線で使用していた北陸トンネル内では一部キャリアは通じなかったのですが、新北陸トンネルを含め、北陸新幹線のすべてのトンネル内で携帯電話を使うことができます。こういった技術の進歩もまた興味深いものです。

終点、そして新たな始まりを感じた敦賀駅

トンネルを出てしばらくすると、遠くにきらりと光る海。ついに終点、敦賀駅です。かつてはヨーロッパまで渡航できる「欧亜国際連絡列車」の玄関口でもあった敦賀。かつてこの地の交易を担っていた北前船の帆をイメージしたコンコースや、甲板のようなホーム床からも、スケール大きさや港町の風情を感じます。駅外観のデザインは「波の煌めき」「飛翔するユリカモメ」がモチーフ。これもまた、大海へと続いていた玄



「北陸新幹線弁当」（左）。敦賀鉄道資料館（右）



越前市の花「菊」をモチーフとした待合室の壁面

関口の名残を思わせます。

この日は、平日にも関わらず多くの観光客がわっと下車して行きました。整備新幹線最大規模、19 通路ある乗換え改札もてんこ舞いの様子。それだけ多くの方が訪れているのですね。

歴史残る赤レンガ倉庫など、敦賀の見どころはたくさんありますが、私のお気に入りには「敦賀鉄道資料館」。かつての敦賀港駅を模した駅舎で、日本海側で最初に鉄道が敷設された交通の要衝・敦賀の歴史を存

分に知ることができます。この街が大動脈の終点となり、また新たな歴史が刻まれるのだなと感じられた時間でした。

最後は、北陸本線時代から変わらぬ駅弁屋さんにて「北陸新幹線弁当」を購入して、再び北陸新幹線で帰路へ。訪れた駅があっという間に過ぎ去っていきます。1 つひとつに個性そしてストーリーがあった駅舎を見送りながら、“これから”がまた、楽しみになりました。

敦賀



全長約 200m。開放感を感じられるコンコース



敦賀駅西口



敦賀湾の潮風に吹かれる